

かなしみはちからに、

～賢治と嘉内 銀河鉄道の二人 続編～

(決定稿) (2017.03.07 修正)

台本 しままなぶ
作曲 寺嶋 陸也

《初演》 Ⅱ樹の会ユースクワイア～奏～第3回演奏会 2015年7月18日(土)

杉並公会堂

合唱 樹の会ユースクワイア～奏～

指揮 藤井 宏樹
ピアノ 寺嶋 陸也
クラリネット 草刈 麻紀

演出 しままなぶ
照明 大鷲 良一

「かなしみはちからに」・登場人物表

宮澤賢治
保阪嘉内
嘉内の妻

四郎
かん子
子狐三郎

母の声
父の声
とし子の声

生徒（バナナン大将）
生徒（曹長）
生徒（特務曹長）
生徒A
生徒B
生徒C
生徒D
生徒E
生徒F
生徒G
生徒H

「かなしみはちからに」・慷慨 (物語の背景、流れ)

汽車に乗って花巻へ帰っていく賢治。嘉内との別れに深く傷ついていた賢治が、一人で汽車に乗りはるか北国の花巻へとゴトゴト揺られている姿は、カムパネルラと別れ一人車室に取り残されたジヨバンニの姿に重なる。

一月に3千枚も書いたといわれる大量の原稿を詰め込んだ大きなトランクを持って帰郷した賢治は、その自作の童話を読んで聞かせたり、持ち前のユーモアで弟たちを楽しませ、明るくふるまう。しかし心の内には、嘉内への思いや、正しいと思っていた道への疑いや、道から外れてしまった事の苦しみに満ちていた。その苦悩は、冬のスケッチ、春と修羅といった詩・心象スケッチに告白されている。

教師となり、そのユーモアや知識を存分に発揮した賢治。童話の創作も続けられ、嘉内へも雑誌に自分の童話(雪渡り)が掲載されたことを知らせる。自分の今を知らせるさわやかな手紙。しかし内面では苦悩が続いていた。家族で唯一自分と道を共にしようとした妹・としの死は賢治の心を破壊的に打った。自分は道を外れて「修羅」を歩いているのに、としは道を信じて独りその道へ踏み出していく。本当にその道はあるのか、行くべきところへ行けずに彷徨ってはいいないか、そちらの世界から正しいところへ来ていると知らせてはくれまいかと苦悩する賢治。

喜びに満ちた4年間の教員生活をやめ、教える側から実践する側へ、農民としての道へ踏み出す。羅須地人協会の活動。賢治は精力的に肥料設計や稲作指導に励む。その様子は嘉内へも伝わる(おそらく手紙で)。忙しい最中、詩作や音楽の勉強。しかし、農民からの拒絶や病気による体の衰退からそれを諦めざるを得なかった。三年の間病床で詩を書く。

小康を得て、東北砕石工場の技師として働くが、その無理がたたり再び病臥、大きなダメージとなる。その後回復しなかった。

死の前年に「児童文学」に掲載された『グスコブドリの伝記』は自己犠牲の物語。嘉内は長男の病床で『グスコブドリの伝記』を読み聞かせる。

恐らく死の直前まで手元において推敲が続けられたであろう『銀河鉄道の夜』に、カムパネルラが溺れた友を助け自らは浮かんでこない場面が書き加えられる。

重篤な状態で、肥料相談に来た人に丁寧に応じ、翌日、『国訳妙法蓮華経』一千部を作って頒布してほしいと遺言、逝去。

暗い舞台上、「ガタン ゴトン ガタン ゴトン・・・」と汽車の音が静かに聞こえてくる。同時にゆっくり明転すると、そこは北へ向かう汽車の中。乗客たちが各々にぎやかに語らっている。賢治は独り静かに窓から外を眺めている。

ガタン、ゴトンという汽車の音と乗客たちの賑わいが突然ぴたりと止まると同時に、賢治にサス、曲が in。

♪①『月夜のでんしんばしら より』

どういふわけか、二本のはしらがうで木を組んで、びっこを引いていつしよにやってきました。そしていかにもつかれたやうにふらふら頭をふつて、それから口をまげてふうと息を吐き、よろよろ倒れさうになりました。するとすぐうしろから来た元気のいいはしらがどくなりました。

「おい、はやくあるけ。はりがねがたるむぢやないか」

ふたりはいかにも辛さうに、いつしよにこたへました。

「もうつかれてあるけない。あしさが腐り出したんだ。長靴のタールもなにももうめちやくちやになつてんだ」

うしろのはしらはもどかしさうに叫びました。

「はやくあるけ、あるけ。きさまらのうち、どつちかが参つても一万五千人みんな責任があるんだぞ。あるけつたら」

明かりが静かに切り替わり夜となる。満天の星。

♪②『あまの川』

あまのがは

岸の子砂利も見見えるぞ。

底のすなごも見見えるぞ。

いつまで見ても、

見えないものは、水ばかり。

(賢治、空を見上げている。思いは嘉内へと。)

♪③『おもかげ』 (冬のスケッチ 六)

心象の燐光盤に

きみがおもかげ来ぬひまは

たまゆらをほのにやすらふ

そのことのかなしき。

てんがせき
天河石、心象のそら

うるはしきときの

きみがかげのみ見え来れば

せつなくてわれ泣けり。

クロスによって（あるいは生徒たちに）、背広を着せられネクタイを締められ、きっちりしたスーツ姿になる賢治。生徒たちを前に笑顔で立っている賢治。そこは教室、英語の授業だ。

賢治 「よし、スプリング競争をやろう。奇数月生まれはA班、偶数月生まれはB班、二つの班に分かれて。」

生徒たちワイワイやりながら二班に分かれる。

賢治 「では、辞書で調べてもいいので、できるだけ長い単語を黒板に書きだしてください。一番長い単語を見つけた班が勝ちです。Ready steady go」

生徒たちがガヤガヤとにぎやかに、黒板に単語を書き始める。「オクトーバー」「カレイドスコープ」などと口に出しながらどんどん書いていく。やがて長い単語が見つからなくなり、

生徒A 「先生、もう見つかりません。」

賢治 「おや、そうですか、よく探しましたか。」

生徒 A

「うーん、探したども・・・」

生徒 B

「先生、こんなもんでねえですか」

賢治

「諸君がまだ見つけられない単語が一つありますよ。」

生徒たち口々に「何ですか？」「何だべ」など。

生徒 C

「先生、それは何ですか？」

賢治

「smiles 微笑みです」

生徒たち騒然とする。「ええ？」「みじけえよなあ」「なして？」など。

生徒 C

「先生、どうしてですか」

賢治

「だってこれなら、s と s の間に、1 マイルもあるのだからねえ」

歓声を上げ、大笑いの生徒たち。

賢治に明かりが絞られる。

賢治

「保阪嘉内様。しばらくご無沙汰いたしました。お赦し下さい。度々のお便りありがたう存じます。私から便りを上げなかつたことみな無精からです。済みません。しきりに書いて居ります。書いて居ります。お目にかけてたくも思ひます。愛国婦人という雑誌にやつと童話が一二篇出ました。(雑誌を手にした嘉内が明かりに浮かび上がる)一向いけません。学校で文藝を主張して居ります。芝居やをどりを主張して居ります。けむたがられて居ります。笑はれて居ります。授業がまづいので生徒にいやがられて居ります。春になったらいらつしやいませんか。関さんも来ますから。さよなら。」

嘉内、雑誌を開いて「雪渡り」を読み始める。

♪④ 『雪渡り』 (嘉内の朗読と合唱)

嘉内 「雪渡り 小狐の紺三郎。雪がすっかり凍って大理石よりも堅くなり、空も冷たい滑らかな青い石の板で出て来てゐるらしいのです。」

堅雪かんこ、しみ雪しんこ

嘉内 「お日様がまつ白に燃えて百合の匂を撒きちらし又雪をぎらぎら照らしました。木なんかみんなザラメを掛けたやうに霜でびかびかしてゐます。」

堅雪かんこ、しみ雪しんこ

嘉内 「四郎とかん子とは小さな雪沓(せつた)をはいてキックキックキック、野原に出ました。こんな面白い日が、またとあるでせうか。いつもは歩けない黍(きび)の畑の中でも、すすきで一杯だった野原の上でも、すすきの方へどこ迄も行けるのです。平らなことはまるで一枚の板です。そしてそれが沢山の小さな小さな鏡のやうにキラキラキラキラ光るのです。」

堅雪かんこ、凍^しみ雪しんこ。

堅雪かんこ、凍^しみ雪しんこ、狐の子あ、嫁^よいほしい、ほしい (四郎とかん子)

(しばらくくしいんとした後、森の中から)

凍み雪しんしん、堅雪かかん (狐の子)

狐こんこん白狐、お嫁ほしけりや、とってやるよ (四郎)

四郎はしんこ、かん子はかんこ、おらはお嫁はいらないよ (狐の子)

狐こんこん、狐の子、お嫁がいらなきや餅やるか (四郎)

四郎はしんこ、かん子はかんこ、黍きびの団子をおれやるか (狐の子)

狐こんこん狐の子、狐の団子は兎うさぎのくそ (かん子)

小狐三郎 「(笑って) いいえ、決してそんなことはありません。」

四郎 「そいぢゃきつねが人をだますなんて偽かしら」

小狐三郎 「偽ですとも。けだし最もひどい偽です。だまされたといふ人は大抵お酒に酔ったり、臆病でくるくるしたりした人です。面白いですよ。甚兵衛さんがこの前、月夜の晩私たちのお家の前に坐って一晩じゃうるりをやりましたよ。私らはみんな出て見たのです。」

四郎 「甚兵衛さんならじゃうるりじゃないや。きつと浪花ぶしだぜ」

小狐三郎 「ええ、さうかもしれません。とにかくお団子をおあがりなさい。私のさしあげるのは、ちゃんと私が畑を作って播いて草をとって刈って叩いて粉にして練ってむしてお砂糖をかけたのです。いかがですか。一皿さしあげませう。」

四郎 「紺三郎さん、僕は丁度いまね、お餅をたべて来たんだからおなかが減らないんだよ。この次におよばれしょうか」

小狐三郎 「そんなら今度幻燈会するときさしあげませう。幻燈会にはきつといらっしやい。この次の雪の凍った月夜の晩です」

(喜んでうなづく二人)

キック キック トントン キック キック トントン

凍^しみ雪しんこ、堅^か雪かんこ、

野原のまんぢゅうはポップポポ。

酔^よってひよろひよろ太右衛門が、

去年、三十八、たべた。

凍み雪しんこ、堅雪かんこ、

野原のおそばはホッホッホ。

酔ってひよろひよろ清作が、

去年十三ばいたべた

キック キック トントン キック キック トントン

キック キック キック キック トントントン

狐こんこん狐の子、去年狐のこん兵衛が、ひだりの足をわなに入れ、こんこんばたばたこんこん (四郎)

狐こんこん狐の子、去年狐のこん助が、焼いた魚を取るとして おしりに火がつききやんきやんきやん (かん子)

キック キック トントン キック キック トントン

キック キック キック キック トントントン

小狐三郎 「鹿の子もよびませうか。鹿の子はそりや笛がうまいんですよ」

堅雪かんこ、凍み雪しんこ、鹿の子あ嫁いほしいほしい (三人)

北風ぴいぴい風三郎、西風どうどう又三郎 (鹿の子、細い声)

堅雪かんこ、凍み雪しんこ、しかの子あ嫁いほしい、ほしい (三人)

北風びいびい、かん「かん」

西風どどどど、どどどど「ずっと遠くの方で」

小狐三郎 「雪が柔らかになるといけませんからもうお帰りなさい。今度月夜に雪が凍ったらきつとおいで下さい。さっきの幻燈をやりますから」

堅雪かんこ、凍み雪しんこ

堅雪かんこ、凍み雪しんこ

嘉内 「四郎とかん子とは、堅雪かんこ、凍み雪しんこ、と歌ひながら銀の雪を渡っておうちへ帰りました。」

(作品への感動と、賢治への思いをこめて)

4 煩悶、思いへの決別

♪⑤ 「透明な軌道」 (小岩井農場 パート九より)

四郎とかん子が去った雪原に一人佇む賢治。風が吹いている(クロスによる擬音「シュー」)
ゆっくりと歩き始める賢治。

すきとほつてゆれてゐるのは

さっきの剽悍ひやうかんな四本のさくら

わたくしはそれを知ってゐるけれども

眼にははつきり見てゐない

たしかにわたくしの感官の外で

つめたい雨がそそいでゐる

(天の微光にさだめなく

うかべる石をわがふめば

おゝユリア しづくはいとど降りまさり

カシオペーアはめぐり行く)

ユリアがわたくしの左に行く

大きな紺いろの瞳をりんと張って

ユリアがわたくしの左に行く

ペムペルがわたくしの右にゐる

………はさつき横へ外れた^そ

あのから松の列のところから横へ外れた

《幻想が向ふから迫つてくるときは

もうにんげんの壊れるときだ》

わたくしははつきり眼をあいてあるいてゐるのだ

ユリア、ペムペル、わたくしの遠いともだちよ

わたくしはずゐぶんしばらくぶりで

きみたちの巨きなまつ白なすあしを見た

どんなにわたくしはきみたちの昔の足あとを
白聖系の頁岩の古い海岸にもとめただらう

《あんまりひどい幻想だ》

わたくしはなにをびくびくしてゐるのだ
どうしてもどうしてもさびしくてたまらないときは
ひとはみんなきつと斯ういふことになる
きみたちとけふあふことができたので
わたくしはこの巨きな旅のなかの一つづりから
血みどろになって遁げなくてもいいのです

(ひばりが居るやうな居ないやうな

腐植質から麥が生え

雨はしきりに降ってゐる)

さうです、農場のこのへんは
まったく不思議におもはれます
どうしてかわたくしはここらを

der heilige Punkt と

呼びたいやうな気がします

この冬だつて耕耘部まで用事で来て
こゝいらの匂のいゝふぶきのなかで
なにとはなしに聖いところもちがして

凍えさうになりながらいつまでもいつまでも
いつたり来たりしてゐました

さつきもさうです

どこの子どもらですかあの瓔珞をつけた子は

《そんなことでだまされてはいけない

ちがつた空間にはいろいろちがつたものがある

それにだいいちさつきからの考へやうが

まるで銅版のやうなのに気がつかないか》

雨のなかでひばりが鳴いてゐるのです

あなたがたは赤い瑪瑙の棘でいつばいな野はらも

その貝殻のやうに白くひかり

底の平らな巨きなすあしにふむのでせう

もう決定した そつちへ行くな

これらはみんなただしくない

いま疲れてかたちを更へたおまへの信仰から

発散して酸えたひかりの澱だ

ちいさな自分を劃ることのできない

この不可思議な大きな心象宇宙のなかで

もしも正しいねがひに燃えて

じぶんとひとと万象といつしよに

至上福祉にいたらうとする

それがある宗教情操とするならば

そのねがひから碎けまたは疲れ

じぶんとそれからたつたもひとつのたましひと

完全そして永久にどこまでもいつしよに行かうとする

この変態を恋愛といふ

そしてどこまでもその方向では

決して求め得られないその恋愛の本質的な部分を

むりにもごまかし求め得やうとする

この傾向を性慾といふ

すべてこれら漸移のなかのさまざまな過程に従つて

さまざまな眼に見えまた見えない生物の種類がある

この命題は可逆的にもまた正しく

わたくしにはあんまり恐ろしいことだ

けれどもいくら恐ろしいといつても

それがほんたうならしかたない

さあはつきり眼をあいてたれにも見え

明確に物理学の法則にしたがふ

これら実在の現象のなかから

あたらしくまつすぐに起て

明るい雨がこんなにあのしくそそぐのに

馬車が行く 馬はぬれて黒い

ひとはくるまに立つて行く

もうけつしてきびしくはない

なんべんさびしくないと云つたところで

またさびしくなるのはきまつてゐる

けれどもここはこれでいいのだ

すべてさびしさと悲傷とを焚いて

ひとは透明な軌道をすすむ

ラリッククス ラリッククス いよいよ青く

雲はますます縮れてひかり

わたくしはかつきりみちをまがる

とし子の死 教師としての充実

明るい光の中を力強く歩く賢治。不意に立ち止まり、決意したようにゆっくりと戸を引く。

明かりが変わり、危篤のトシが横になっている部屋。賢治は動揺するのを必死にこらえている。

賢治 「トシ……。」（静かに座る賢治）

トシの声 「おら おかないふうしてらべ」

母の声 「うんにゃ ずいぶん立派だちやい。きょうはほんとに立派だちやい」

賢治

「ほんとうにそうだ。髪だっていつそう黒いし、まるでこどもの苹果の頬だ。どうかきれいな頬をして、あたらしく天にうまれてくれ。」

トシの声

「それでもからだくさえがべ」

母の声

「うんにゃ いったう」

賢治

「ほんとうにそんなことはない。かえってここは夏の野原の小さな白い花の匂いでいっぱいだから。ただわたしはそれをいま言えないのだ。」

賢治の別の声

「わたくしは修羅を歩いているのだから」

♪⑥「永訣の朝」

※（あめゆじゆとてちてけんじや）は、花巻の言葉で、本来は「あめゆき（ぎ） とてきて けでじや」または「あめゆき（ぎ） とてきて けるじや」と言うべきところを、死の間際に体にも入らず、呼吸も浅く、弱弱しくやっと発している言葉、うまくしゃべることの出来ないトシの言葉を、そう聞こえるままに表記したものと私は理解しております。

けふのうちに

とほくへいつてしまふわたくしのいもうとよ
みぞれがふつておもてはへんにあかるいのだ

（あめゆじゆとてちてけんじや）

うすあかくいつそう陰惨な雲から

みぞれはびちよびちよふつてくる

（あめゆじゆとてちてけんじや）

青い蓴菜じゅんさいのもやうのついた

これらふたつのかけた陶碗たうわんに

おまへがたべるあめゆきをとらうとして

わたくしはまがつたてつばうだまのやうに

このくらいみぞれのなかに飛びだした

(あめゆじゆとてちてけんじや)

蒼鉛さうえんいろの暗い雲から

みぞれはびちよびちよ沈んでくる

ああとし子

死ぬといふいまごろになつて

わたくしをいつしやうあかるくするために

こんなさつぱりした雪のひとわんを

おまへはわたくしにたのんだのだ

ありがたうわたくしのけなげないもうとよ

わたくしもまつすぐにすすんでいくから

(あめゆじゆとてちてけんじや)

はげしいはげしい熱やあへぎのあひだから

おまへはわたくしにたのんだのだ

銀河や太陽 気圏などとよばれたせかいの

そらからおちた雪のさいごのひとわんを……

……ふたきれのみかげせきざいに

みぞれはさびしくたまつてゐる

わたくしはそのうへにあぶなくなつた

雪と水とのまつしろな二相系にさうけいをたもち

すきとほるつめたい雫にみちた

このつややかな松のえだから

わたくしのやさしいもうとの

さいごのたべものをもらつていかう

わたしたちがいつしよにそだってきたあひだ

みなれたちやわんのこの藍のもやうにも

もうけふおまへはわかれてしまふ

(Ora Ora de Shitori egumo)

ほんたうにけふおまへはわかれてしまふ

あああのとざされた病室の

くらいびやうぶやかやのなかに

やさしくあをじろく燃えてゐる

わたくしのけなげないもうとよ

この雪はどこをえらばうにも

あんまりどこもまつしろなのだ

あんなおそろしいみだれたそらから
このうつくしい雪がきたのだ

(うまれでくるたて

こんどはこたにわりやのごとばかりで
くるしまなあよにうまれてくる)

おまへがたべるこのふたわんのゆきに

わたくしはいまころからいのる

どうかこれが天上のアイスクリームになつて

おまへとみんななどに聖い資糧たふとをもたらすやうに

わたくしのすべてのさいはひをかけてねがふ

昇りはじめた輝く朝日に向かって歩いてる賢治。そこに生徒たちが加わる。生徒の一人が賢治に声をかけると、明かりが変わり、そこは実習で訪れた北上川の岸。生徒たちは、はあはあ息を弾ませながら楽しそうだ。

生徒 D

「賢治先生、どこまでいくのっすか」

賢治

「ようし、ここでもいいぞ。・・・われわれが今こうして立っている場所は、大昔は海だったのです」

ざわざわとする生徒たち。

賢治

「その証拠にここに貝の化石があります。みなさんの足元にも見つかるでしょう。良く探して見てください。これは第三期層泥岩の化石であるから、新しくとも百七十万年以上前のものだ。」

(ワイワイと化石探しやスケッチをする生徒たち。)

賢治

「ほっほーい！」（突如飛び上がってコマのようにまわり、ものすごい勢いで手帳に何やら書きつける賢治。
生徒たちそれを見て笑っている。

生徒E

「また何か思いついたんだな先生」

生徒F

「んなんだな。賢治先生！今日はうまくいきましたか」

賢治

「（手帳に書き終えて）ようしようし。」

生徒F

「うまくいったようだろう。」

生徒たち実に愉快に笑っている。

生徒D

「これなんだ？！」（生徒たち集まって騒ぎ出す「足跡じゃねえのか」「なんだ！足跡だ」などと盛り上がる）

生徒D

「せんせい！賢治先生！これ見てください！」（賢治、それを見に行つて）

賢治

「これは貴重なものかもしれない。よし、標本を採ろう。石膏で型を取るぞ。一度戻って準備だ」

生徒たち、わいわいと駆け出していく。

銅鑼が打たれ場面は急に切り替わる。賢治は台本を手にして、生徒たちが『飢餓陣営』の一場面を練習している。

（バナナン大将、曹長、特務曹長、兵士①〜⑩、銅鑼係がいる）

賢治

「よし、せば、大将の登場する手前からやるぞ。曹長、特務曹長の歌から。兵隊は上下袖から。いいか、いくぞ。
銅鑼、よいい・・・はい！」

生徒の一人が銅鑼を打ち、曹長、特務曹長歌いだす。

(銅鑼)

曹長・特務曹長歌いだす

♪⑦-p 「大将ひとりで」

♪ 「大将ひとりでどこかの並木の

苹果りんごを叩いてゐるかもしれない

大将いまごろどこかのはたけで…

賢治

「はい、待った待った。曹長も特務曹長も元気良すぎるべ、それだえば。疲労困ぱい、空腹でふらふら。ね、もう一回行くよ。銅鑼ようい、はい！」

(銅鑼)

曹長・特務曹長かなり疲れた様子で歌う。

♪ 「大将ひとりでどこかの並木の

苹果りんごを叩いてゐるかもしれない

大将いまごろどこかのはたけで

人蔘にんじんガリガリ 噛んでるぞ。」

(銅鑼)

右隊(兵士①～⑤) 入場。著しく疲れて歩くのがやっと。

曹長歌う

♪⑦「大将は帰らない」

♪「七時半なのにどうしたのだらう

バナナン大将はまだ来てゐない

七時半なのにどうしたのだらう

バナナン大将は 帰らない。」

左隊(兵士⑥～⑩) 登場 最も疲れている。

曹長・特務曹長歌う

♪「もう八時なのにどうしたのだらう

バナナン大将は まだ来てゐない。

もう八時なのにどうしたのだらう

バナナン大将は 帰らない。」

(銅鑼)

立てるもの合唱（きれぎれに）

♪「いくさで死ぬならあきらめもするが

いまごろ餓^うえて死にたくはない

あゝただひとときこれこの世のなごりに

バナナかなにかを 食ひたいな。」

（共に倒れる。一人奇妙な動きで倒れるものがある）

「おい、齊藤さん。少しやり過ぎだべな、それだえば。」

（生徒たち笑う）

「おかしな方が良いかと思って」

「おかしすぎるべな」

（生徒たち笑う）

「それだとかえって元気に見えるからね。ゆっくりと倒れてみようか」

「（しょんぼりと）はい、わかりました」（生徒たち笑う）

「それでは合唱から。…はい」

（銅鑼）

立てるもの合唱（きれぎれに）

♪「いくさで死ぬならあきらめもするが

いまごろ餓ゑて死にたくはない

あゝただひとときれこの世のなごりに

バナナかなにかを 食ひたいな。」（兵士たち共に倒れる）

（銅鑼）

バナナン大将登場。（バナナのエボレットを飾り菓子勲章を胸に満せり）

バナナン大将歌う

♪⑦「つかれたつかれた」

♪「つかれたつかれたすつかりつかれた

脚はまるつきり 二本のステッキ

いったいすこうし飲み過ぎたのだし

馬肉もあんまり食ひすぎた。」

（叫ぶ。）「何だ。まっくらじゃないか。今ごろになってまだあかりも点けんのか。」

兵士等辛うじて立ちあがり拳手の礼。

大将 「灯あかりをつけろ、間拔けめ。」

（曹長点燈する。兵士等大将のエボレット勲章等を見て食せんとするの衝動はなはだ甚し。）

生徒Aまるでゾンビのようにして大将のエボレットに寄っていく。

気持ち悪がって後ずさりする大将。

賢治

「おいおい、長坂さん。それは方向性が違うなあ」（生徒たち笑う）

大将役

「うわぁ気持ち悪かった」（生徒たち大笑い）

生徒G

「賢治先生、おらもうホントに腹減ったじゃい。」（他の生徒「おらも」「おらもだ」等。みんな笑っている）

賢治

「よし、そうだな。みんな遅くまでご苦労さん。最後の行進歌の合唱を一回だけ歌って、今日の稽古を終わりますよう」

（生徒たち口々に、「はい」「よし」等。）

一斉に歌い始める。賢治も見本を見せるように途中から参加して、誰よりも生き生きと大きな声で歌う。

♪⑦「バナナン大将の行進歌」

いさをかがやく バナナン軍

マルトン原に たむろせど

荒⁺さびし山河の すべもなく

飢餓の 陣営 日にわたり

夜をもこむれば つはものの

ダムダム弾や 葡萄弾

毒瓦斯タンクは 恐れねど

うゑとつかれを いかにせん。

(誰よりも勢いのある賢治先生を笑い、笑顔で去っていく生徒たち)

賢治が独り喜びに満ちた表情で立っている。

賢治

「保阪嘉内様。お手紙ありがとうございました

来春はわたくしも教師をやめて本統の百姓になって働きます いろいろな辛酸の中から青い蔬菜そさいの畦やドロの木
の閃ひらめききや何かを予期します わたくしも盛岡の頃とはずるぶん変わっています

あのころはすきとほる冷たい水精のやうな水の流ればかり考へてゐましたのにいまは苗代や草の生ゑた堰のうす
ら濁つたあたたかなたくさんの微生物のたのしく流れるそんな水に足をひたしたり腕をひたして水口を繕つたり
することをねがひます

お目にかかりたいのですがお互いもう容易のことでもなくなりました 童話の本さしあげましたでせうか」

『注文の多い料理店』を手に、楽しそうにしている嘉内とその妻がいる。

明かりが切り替わると、鋤を手にして賢治が立っている。鋤を振りながら、『農民芸術概論綱要』を一文一文読み上げていく。

賢治 「おれたちはみな農民である ずるぶん忙しく仕事もつらいもつと明るく生き生きと生活をする道を見付けたい

われらの古い師父たちの中にはさういふ人も応々あった」

農民の声 「月給取りが百姓だどやあ」「なんぼあだまい頭良いいいったつて、はだけす畑だけすしごどあちがうんだあ」「やつぱり、おめだづあおめだづなんだじゃ」（批判、嘲笑の声）

賢治 「近代科学の実証と求道者たちの実験とわれらの直観の一致に於て論じたい

世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない

自我の意識は個人から集団社会宇宙と次第に進化する」

農民の声 「おらの所も、畑の肥料設計、お願い出来ねえべすか」「窒素肥料てのは初めにやった方がいいのすか」「配合の仕方教えてもらえねべすか」「追肥はなんじよにしたらいがべな」「助かります。なにもお礼できなくて、もつさげねなつす（申し訳ないです）。ほんとに助かります」

賢治 「この方向は古い聖者の踏みまた教へた道ではないか（徐々に体も声も弱っていく）

新たな時代は世界が「の意識になり生物となる方向にある」 ※「」を、今回は「ひとつ」と読むことにする。

農民の声 「ああ、みんな倒れてしまった」「全滅だ」「これだけ一つも獲れね」

賢治

「正しく強く生きるとは銀河系を自らの中に意識してこれに応じて行くことである（息をしているのがやつとなほど弱弱しく）」

われらは世界のまことの幸福を索ねよう 求道すでに道である（ハアハアと息も絶え絶え…）

・・・（力を振り絞り）われらに要るものは銀河を包む透明な意志 巨きな力と熱である！」

賢治力なく咳をし、倒れる。布団をかけられる。

♪⑧ 「病床」

たけにぐさに

風が吹いてゐるといふことである

たけにぐさの群落にも

風が吹いてゐるといふことである

新しい仕事

（トランクを提げてゆつくりと歩きだす賢治）

母の声

「まだ具合悪くなったら、なんじよするって」

「

鈴木の声

「石材の説明を賢治さん以上にできる人は、うちの会社にはいません。だども身体の方は…」

賢治

「大丈夫ですから。もうすっかり良くなりました。」

母の声

「そのからだで東京きなんぞ。行がねでける」

賢治

「心配しないでください。これは素晴らしい仕事なんですから。」

鈴木の声

「申し訳ないです。肥料だけじゃなく、壁材、建築材料としても販売できるようになれば、うちの会社もなんとか。」

賢治

「はい、しっかりやって参ります。石材の標本は全部、すっかりトランクに収まりました。」

ガタンゴトン ガタンゴトン という汽車の音が徐々に大きくなり、倒れるように席に座る賢治。座る体にも力がなく、丸の字に曲がると、床に崩れ落ちる。と同時に時が止まったかのように汽車の音が止まる。

明かりが切り替わると、嘉内が病床の息子に『グスコブドリの伝記』を読み聞かせている

嘉内

「それから三日の後、火山局の船が、カルボナード島へ急いで行きました。そこへいくつもものやぐらは建ち、電線は連結されました。」

すっかりしたくができると、ブドリはみんなを船で帰してしまつて、じぶんは一人島に残りました。

そしてその次の日、イーハトーヴの人たちは、青ぞらが緑いろに濁り、日や月が銅（あかがね）いろになったのを見ました。

けれどもそれから三四日たちますと、気候はぐんぐん暖かくなってきて、その秋はほぼ普通の作柄になりました

た。そしてちょうど、このお話のはじまりのようになるはずの、たくさんのブドリのおとうさんやおかあさんは、たくさんのブドリやネリといっしょに、その冬を暖かいたべものと、明るい薪（たきぎ）で楽しく暮らすことができたのでした。

・・・このお話を書いた宮澤賢治さんはな、お父さんの親友さ。今に賢治さんはうんと有名になって、この物語だつてきつと、日本中みんなが読むようになるぞ。」

『銀河鉄道の夜』のカムパネルラが水の中に見えなくなる場面。賢治がジヨバンニとして登場する。

人々が川に向かって騒然としている。

賢治（ジヨバンニ） 「何かあったんですか」（叫ぶように）

♪⑨ 「あの銀河のはずれに」（銀河鉄道の夜より）

「こどもが水へ落ちたんですよ。」一人が云いますとその人たちは一斉にジヨバンニの方を見ました。ジヨバンニはまるで夢中で橋の方へ走りました。橋の上は人でいっぱい、河が見えませんでした。白い服を着た巡査も出ていました。

ジヨバンニは橋の袂から飛ぶように下の広い河原へおりました。

その河原の水際に沿ってたくさんのあかりがせわしくのぼったり下ったりしていました。向う岸の暗いどてにも火が七つ八つうごいていました。そのまん中をもう烏瓜のあかりもない川が、わずかに音をたてて灰いろにしずかに流れていたのです。

河原のいちばん下流の方へ州すのようになって出たところに人の集りがくつきりまっ黒に立っていました。ジョバンニはどンドンそっちへ走りました。するとジョバンニはいきなりさつきカムパネルラといっしょだったマルソに会いました。マルソがジョバンニに走り寄ってきました。

「ジョバンニ、カムパネルラが川へは行ったよ。」

「どうして、いつ。」

「ザネリがね、舟の上から烏うりのあかりを水の流れる方へ押してやろうとしたんだ。そのとき舟がゆれたもんだから水へ落っこったろう。するとカムパネルラがすぐ飛びこんだんだ。そしてザネリを舟の方へ押してよこした。ザネリはカトウにつかまった。けれどもあとカムパネルラが見えないんだ。」

「みんな探してるんだろう。」

「ああすぐみんな来た。カムパネルラのお父さんも来た。けれども見附みつからないんだ。ザネリはうちへ連れられてった。」

ジョバンニはみんなの居るそっちの方へ行きました。そこに学生たち町の人たちに囲まれて青じろい尖とがったあごをしたカムパネルラのお父さんが黒い服を着てまっすぐに立って右手に持った時計をじっと見つめていたのです。

みんなもじっと河を見ていました。誰も一言も物を云う人もありませんでした。ジョバンニはわくわくわくわく足がふるえました。魚をとるときのアセチレンランプがたくさんせわしく行ったり来たりして黒い川の水はちらちら小さな波をたてて流れているのが見えるのです。

下流の方は川はば一ぱい銀河が巨しく写ってまるで水のないそのままのそらのように見えました。

ジョバンニはそのカムパネルラはもうあの銀河のはずれにしかないというような気がしてしかたなかったのです。

けれどもみんなはまだ、どこかの波の間から、

「ぼくずいぶん泳いだぞ。」と云いながらカムパネルラが出て来るか或いはカムパネルラがどこかの人の知らない洲にでも着いて立っていて誰かの来るのを待っているかというような気がして仕方ないらしいのです。けれども俄かにカムパネルラのお父さんがきっぱり云いました。

「もう駄目です。落ちてから四十五分たちましたから。」

ジョバンニは思わずかけよって博士の前に立って、ぼくはカムパネルラの行った方を知っています。ぼくはカムパネルラといっしょに歩いていたのでと云おうとしましたがもうのどがつまって何とも云えませんでした。すると博士はジョバンニが挨拶に来たとも思ったものですか、しばらくしげしげジョバンニを見ていました。

「あなたはジョバンニさんでしたね。どうも今晚はありがとう。」と町ねいに云いました。

ジョバンニは何も云えずにただおじぎをしました。

「あなたのお父さんはもう帰っていますか。」博士は堅く時計を握ったまままたききました。

「いいえ。」ジョバンニはかすかに頭をふりました。

「どうしたのかなあ。ぼくには一昨日大へん元気な便りがあったんだが。今日あたりもう着くころなんだが。船が遅れたんだな。ジョバンニさん。あした放課後みなさんとうちへ遊びに来てくださいね。」

そう云いながら博士はまた川下の銀河のいっばいにうつった方へじっと眼を送りました。

ジヨバンニはもういろいろなことで胸がいっぱいでもなんにも云えずに博士の前をはなれて早くお母さんに牛乳を持って行ってお父さんの帰ることを知らせようと思うともう一目散に河原を街の方へ走りました。

布団に横になる賢治。

父の声 「それでは、よいか。おまえの願いは、国訳妙法蓮華經ぼん全品を二千部出版し、その表紙は朱色に、校正は北きたむかい向

さんをお願いし、それを知己の人たちに差し上げること。よいか。」

賢治 「はい。その通りです。」

父の声 「それから、お経のうしろには、私の生涯の仕事はこの経をあなたのお手もとに届け、そしてその中にある仏意に触れて、あなたの無上道に入られますことを、と記す。これで良いか」

賢治 「はい。」

父の声 「お前も大した偉いものだ。後は何もいう事はないか。」

賢治 「後はまた起きてから書きます。(弟たちの方に向き直り) 清六、おれもとうとうお父さんにほめられた。(うれしそうに笑う)」

賢治 「お母さん、水。」

賢治、ゆっくり身体を起こしてもらい、土瓶から水をさまうまそうにゴクリゴクリと飲む。それから身体を脱脂綿でふいて、横になる。

賢治 「ああいい気持ちだ。」(肩で弱く息をする)

賢治、肩で弱く息をする。少しの静寂があり。

母の声

「賢さん。・・・賢さん！」

♪⑩「かなしみはちからに、」（保阪嘉内宛書簡㉒ 欄外）

かなしみはちからに、欲^ほりはいつくしみに、いかりは智慧にみちびかるべし。

「ガタン ゴトン ガタン ゴトン・・・」と汽車の音が静かに聞こえてくる。同時にゆっくり明転すると、そこは北へ向かう汽車の中。乗客たちが各々にぎやかに語っている。賢治は独り静かに窓から外を眺めている。ガタン、ゴトンという汽車の音がゆっくりになり、汽車が停車すると、「花巻く 花巻く」と駅員の声が聞こえる。トランクを重たそうに提げて立ちあがる賢治。微笑みながらまっすぐに前を見て立っている。一瞬の静寂があり。

賢治

「やあ。」

しばしの静寂の後、再びガタンゴトンと汽車の音が鳴りだし、静かに溶暗。

汽車の音が遠ざかっていく。

(終わり)